

# カナダの人物

カナダの人物——といっても、日本ではほとんどなじみがない。カナダが生んだ人物は多い。そしてその一人一人が、何らかの意味でカナダという社会あるいはその国民性を反映する。そこで紙面が許す限り、各方面からできるだけ多くの人物を——かなり恣意的に——選び、紹介してみた。ここにあげた人たち以外にも、ノーベル平和賞に輝いたピアソン元外務大臣、トルドー現首相、経済界の雄E・P・テイラーやポール・デマレー、文芸評論家のノースロップ・フライ、歴史家のドナルド・クレイトン(一九七九年没)、作家のモーリー・キャラハンやマーガレット・アトウッド、分光学的世界的権威ヘルツバーグ博士、ジャーナリストのピーター・ノーマンやブルース・ハチソン、歌手のアン・マレーやゴードン・ライトフット、アニメ映画の巨匠ノーマン・マクラレンなど、カナダを代表する人物は枚挙にいとまがない。この中には、本紙ですでに取りあげた人たちもいるが、いずれにしても、紙面の都合上、紹介は他日に譲りたい。

## カナダ随一の歴史作家

### ピエール・バートン

すでに二十数冊の著書を持つピエール・バートンが、一九七九年には一冊も出さなかった。この中断に別に意味はないのだろうか(彼ならこの先、もう二十四五冊は書くにちがいない)、とにかく驚きではあった。なにしろバートンは——土曜の夜のホッケーとか、下院をはじめとする国家機構の質問期間と同じくらいに——キッチリとスケジュールを守って仕事をする人物だと思われるからだ。彼はこの国でもっともよく知られた歴史家(「ナショナル・ドリーム」「ラスト・スパイク」「デイオンヌ・イヤーズ」など)であり、テレビのパーソナリティとして、またプロデューサー(「ナショナル・ドリーム」「ラスト・スパイク」「デイオンヌの五つ子」などの制作)として輝やかしい成功をおさめているが、本質的には素朴でさっぱりした北部の申し子であり(「クロンダイク」「クロンダイク」とともに「漂流家族」)、そして七人の子供の父親である。彼の仕事ぶりはみごとに組織的なもので(専任の調査員バーバラ・シアーズは

印税の三分の一を受け取っている)、巨額の稼ぎをあげた。「マーケット」がなかったらこの材料を書くことはなかったでしょう——マクリン誌のジュディス・ティムソンに彼はこう述べている。

「漂流家族」で、彼は妻と子供たちと共に自分の父親が何十年も前に通った道をたどって、ユーコンの流れを下る筏の旅を描いている。

「父はきっと、金を見つけるチャンスはほとんどないということを知っていたに違いありません。しかしあの一八九八年の春には、戦争に出かけるようにして皆がクロンダイクを目指していたのです。ニュー・ブランズウィックの住人の半数くらいが大陸を横断できる貨物列車を利用して北西部へ向かっている感じでした。父と同じ列車に乗り合わせたのは五百五十人。ほとんどの男たちはそれまで山と山の間を歩いたことのない連中です。父もその一人で、すっかり有頂天になって



しまいました。へこちはすばらしい景色です。彼はバンクーバーのオリエンタル・ホテルから、セント・ジョンにいる